筆者が高校生まですごした高知で確実にオオムラサキと出会えるのは大豊郡梶が森だが、メスを捕らえただけできれいなオスとの真の出会いは日野春が初めて。日野春はまさにオオムラサキの多産が有名で、新宿からの中央線電車利用で 1975 年、1976 年と二度訪れている。初めて訪れる土地でオオムラサキに出会えそうな場所をかぎ分けることはさして難しいことではなく、京都市左京区静市でも初めての訪問時に降り立った叡山電車のホームから周辺景色を見渡し、クヌギの木がある雑木林にねらいを定めて入ると案の定樹液があってオオムラサキを見つけることができる。

July 11,1971 京都市静市市原 オオムラサキ

山梨県日野春は、自動車道路両側に広がるモモやスモモの果樹園周辺に格好の雑木林が密度濃く点在していて、その林の中に適度の小道があちこちに走っていることから、オオムラサキが好む樹液の出ている木を探し当てるのは容易な地域である。東京大学薬学部への国内留学 2 年目の 7 月 7 日、東京での住居を 5 年間住んだ国分寺市恋ヶ窪から都内練馬区高野台に移していて、妻が運転免許を取り「お得のカローラ」300 番での家族ドライブで三度目の日野春をめざす。車がとめられる適当な木陰をみつけたあとは、林の中に見える小さな歩道へと入り込む。容易に樹液の出ているクヌギが何箇所か見つかり、その位置に高低の違いはあれ、ほとんどすべてのケースで複数頭のオオムラサキが樹液を吸っている。息子の浩成（6 才）、娘の純子(5 才)にも交代でネットを持たせ、オオムラサキを捕獲する感激をいとも簡単に体験してもらえた。オムラサキは翅表斑紋が複雑に配置されているせいか、添付写真をみくらべてみるだけでも細かくみれば各個体間で微妙に異なる斑紋をもつことが分かる。僻地教育に力を注いだ筆者の父が校長として赴任した高知吾北村清水で、父：英

July 7,1977 山梨日野春 オオムラサキ

July 7,1977 山梨日野春 オオムラサキ

July 16,1978 山梨日野春 オオムラサキ

雄と母：琵琶子がそれぞれ捕獲してくれた個体のうち、母採集の個体は後翅中室の白紋がはっきりと二分され、その下に並ぶ 4 個の黄色斑点も下から 2 番目が弦月型を呈するなどの変化が面白い。オオムラサキの地理的変異とか個体変異に関しては、栗田貞多男著「オオムラサキ－日本の里山と国蝶の生活史－」（信濃毎日新聞社、2007）に詳しい解説がある。1990 年代に入って、北海道夕張郡栗山町滝ノ下に生息する上記黄色小紋が 3 個ともに三日月型となる特異な一群についての調査が進められ、1996 年、藤岡知夫氏らによって新亜種 *ssp.kuriyamaensis* として日本蝶類学会誌 Butterflies に記載登録された（1996、No.13,p.18-29）。

July 3,1971 高知吾北村清水 leg.Hideo Shimazaki

July 18,1970 高知吾北村清水 leg.Biwako Shimazaki

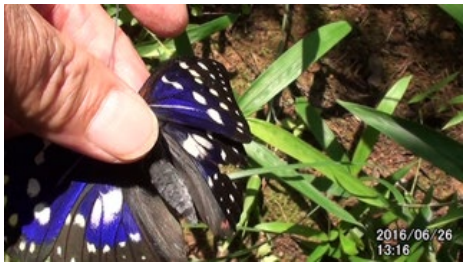
Copyright© 2008- Soft House JUMP. All rights reserved.

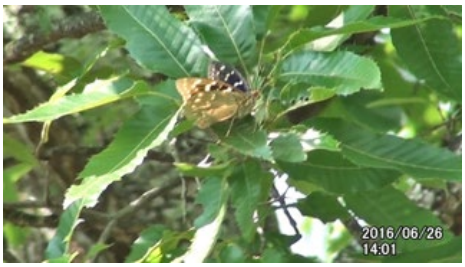
May 27, 2016　モルフォ・ムラサキが羽化

2015 年の 12 月、加古川の里山・ギフチョウ・ネットの前田和彦さんから兵庫県佐用町産の越冬前の幼虫を分けていただいて飼育したなかで、2016 年 5 月 11 日に最初に蛹化した個体が 15 日後の夕方に羽化兆候を示しており、朝起きてからビデオ記録を取ろうと準備を整えて 5 月 27 日の早朝に目覚めたら、想定よりも早い時刻に♂が羽化していて、しかも蛹殻につかまっているはずの羽化個体がいないという状況。あたりを調べると、脱出後に蛹殻につかまる力が弱かったのか完全に翅が伸びる前に落下していて、気づいた時点では右翅は伸びているのに左翅が前後翅ともにしわくちゃのまま固化してしまっていた。悔やまれることに、明るい場所にもっていって観察できたその翅表の輝きが、まさに最近有名になったモルフォ・ムラサキと呼ばれる見事なライトブルー。何とか伸び切った右翅だけでも標本化しておこうとアルバム形式の標本を作成してみたが、通常のオオムラサキの輝きと違う青みを帯びた美しい輝きを感じられる標本に仕上がっている。他の飼育羽化 2 個体にはこのようなブルータイプはでていない。これまで佐用町にこのようなタイプが産するという報告はなく、貴重な記録だと思える。

June 26, 2016　西播磨の樹液食堂へ

オオムラサキの♀を捕獲して産卵してもらうことを目的に西播磨の樹液食堂へと遠征したが、出会えたのはすでに翅の一部が欠けたりしている♂ばかり。高い位置で吸汁している個体は♂♀の判別



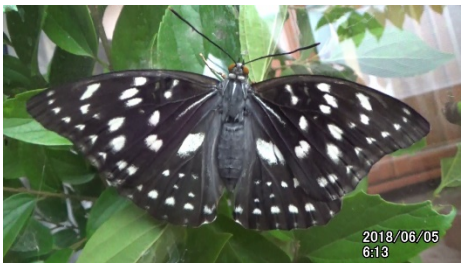


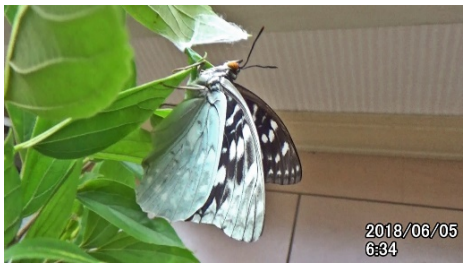
ができないのでネットインをして確認するのだが♀はいなく、♂だと確認をしてから放す。早く放して！とバサバサと大きな音を立ててもがく羽ばたきの力はかなり強く、その間に太陽光線の当たり具合で青味の強い美しい輝きが垣間見られる。手指を離れたオオムラサキは、遠くへとは飛ばずに近くの枯れ枝部分で小休止する個体や、クヌギの葉上で今一度樹液にもどるタイミングを計っているようにみえる個体もいる。15 時まで粘ったが、天候も悪くなり、♀を連れ帰るという目的は果たせず。

Copyright© 2008- Soft House JUMP. All rights reserved.

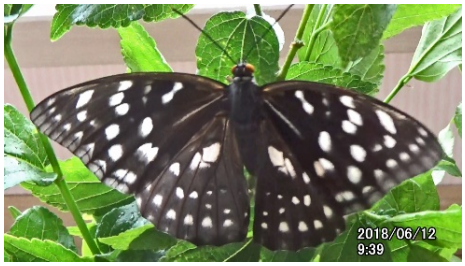
June 5, 12, 2018　オオムラサキのスギタニ型♀が 2 個体羽化

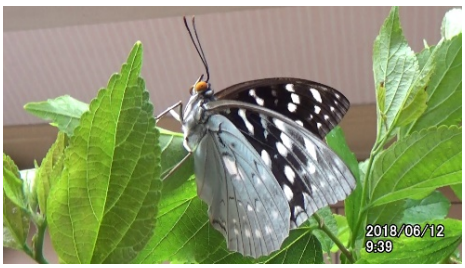
6 月 5 日、オオムラサキが例によって早朝に羽化していた。翅表のすべてが白紋で、通常赤桃色紋が出る後翅表の肛角部も白紋となるスギタニ型 *Sasakia charonda sugitanii* で、採卵した母チョウは赤桃色紋をもつ普通型だった。捕獲した兵庫県佐用町にこのタイプが出ることは知られていて特に驚くことではないが、本タイプの実物を目にするのは初めてのこと。





豊岡方面へと出かける朝、羽化兆候が顕著で間違いなく 10 日中に羽化することが予測できたオオムラサキだったが、11 日に帰宅したあとでも特に確認もせず、今朝（June 12）になって 6 月 5 日





の羽化個体とほとんど同じスギタニ型の♀だと分かった。兵庫県佐用町でスギタニ型の♀が発生することは加古川の里山・ギフチョウ・ネットの友人から聞いてはいたが、実際に産卵してくれているときの記録からもわかる、ごく普通タイプの母チョウに産卵させて飼育をしたなかから 2 個体も出たのは意外で、佐用町には案外密度濃くこの遺伝子タイプが分布している可能性がある。

July 1, 2018　オオムラサキの観察地へと遠征

6 月半ばまでならヒロオビミドリシジミやウラジロミドリシジミが観察できるナラガシワのある場所を横目に走り、最初の観察ポイントを調べると、樹液が枯れきって独特の香りは全くなく、もうここは観察対象ではないと諦める。2016 年に竹内さんたちがスギタニ型♀を観察した樹液のある大木が突然切り倒され、しかもあとで新芽を出して再生できるような切り方ではないのが腹立たしいが、2015 年に筆者が別の場所に新たな樹液食堂をみつけてフォローしてきたところへと足を早める。ところが、樹液がない、いや樹液の出ていた樹木が 2 本とも切り倒されて見えないのだ。確認できるのはここでの切り方もあとで新芽も出ない路面から 20cm も残されていない根株だけ。樹液に来るスズメバチが自然観察目的で訪れる子どもたちに危険を及ぼすから、という話を聞いたことがあるが、樹液に集まるスズメバチは大群であることもなく、人に危害を加える可能性はきわめて低い。樹液にはどのような昆虫が集まり、いい場所取りのために昆虫同志でどのような奪い合いを展開するのか、例えば、オオムラサキとスズメバチはどちらが強いのか等、自然の生きた姿を観察できる好ましい例はそれほど多くはないわけで、いったいここの管理人は何を考えてこのような暴挙を繰り返すのか、理解に苦しむ。残る樹液ポイントはあと 1 か所。わずかの望みをいだいて訪れ、車から出たまさにそのとき、目の前でオオムラサキの♂♀が絡みながら飛ぶ。すぐに樹液のある大

Copyright© 2008- Soft House JUMP. All rights reserved.

木の幹にとまっていよいよ交尾かと期待するが、撮影目的で近づきすぎたのか、この樹液まわりにとどまることなく絡み合い飛翔のまま樹林奥へと消えてしまう。しばらくしておそらく別個体だと思える♂が近くを飛ぶが、われわれが近くにいるせいか樹液へとはやってきてくれない。

時間をあけて戻った樹液食堂には期待通りオオムラサキの♂がやってきている。手ブレ映像とならないように、ビデオカメラを三脚に固定してオオムラサキの動きをしっかりと記録する。後翅に若干の破れや傷みがある個体だが、少しずつ場所を変えるそのたびに何度も翅の開閉を繰り返してみごとなムラサキの輝きをみせてくれる大サービスがありがたく、後翅肛角部の赤桃色も

とても美しい。この♂以外にも近くまでくる個体をみるが、結局樹液を楽しんだのはこの♂だけで、いったんどこかへと飛び去る。

Copyright© 2008- Soft House JUMP. All rights reserved.